経済論叢（京都大学）第189巻第1号，2015年4月

〈戦 前 編〉

日本経済史の特性

（第16巻第6号，1923年，911-921頁）

本　庄　栄治郎*

【解　題】本庄栄治郎は河上肇に経済史を学び，京都帝国大学文科大学の内田銀蔵に個人的に指導を受けて日本経済史研究を行った。1930年の社会経済史学会の発足にも尽力し，1933年に開設された日本経済史研究所において『日本経済史辞典』の編集を行うとともに宮本又次など多くの経済史研究者を育成した。本庄の日本経済史研究の対象は，出身の西陣，江戸時代の米相場とその調節，日本の人口史，そして江戸時代から明治にかけての日本の経済思想研究など多岐にわたる。本論文は本庄が欧米留学から帰国して教授に昇進し，帝国大学全体で初めての経済史講座を担当し，さらに博士論文「徳川幕府の米価調節」により京都帝国大学で初めての経済学博士の学位を取得した1923年に，自分の考える日本経済史の特徴およびその研究手法を論じたものであり，本庄および本庄門下の京都帝国大学における経済史研究を考える上で重要である。

一

茲に所謂日本経済史の特性とは，日本経済史の観念や学問上の性質を云うのではなく，我が国に於ける経済発達の特徴を指すものであって，詳言すれば，過去より現在に至るまでの，我が国の経済的発達の跡には，他国のそれと異なった何等かの特質が，あるかどうかということを究めんとするものである。

二

論者或は曰く「元来歴史は個々別々のものであって，世界の各国は皆異った歴史を有することは余の弁明を待たざる所である，併しながら世界文明の進歩は一と筋であって，人類発達の沿革は皆同一の軌道を辿り，同一の方向に嚮って進みつつあるのである。故に国々個々の歴史は其の文明の遅速，発達の程度に随て，各々異なりたる現象を顕わし，又其の複雑したる内外関係の差異に依って，多少の異同なきにあらざるも，要する所，世界の歴史は悉く同じ事を繰り返えしつつあるのである。先進国たる甲国の経験した事は，後進国たる乙国の藍本となり，乙国の閲歴した事は，丙国の先例となり，丙国の足跡は丁国の追随する所となるが如きは，畢竟，皆進歩発達の原則に支配されて居るのである」と説き「日本の歴史は世界発達史の一部分と見ざる可らず」との趣旨を明かにして居られる[1)]。

これは一応尤なことである。而してこの筆法から云えば，各国経済の発達も勿論同一の軌道を辿り，同一の方向に嚮って進みつつあるものであるといい得べく，かの経済発達段階説の如きものが成り立つ所以は，各国の経済の発達が，大体に於て同様の傾向を有するに因るものなる

＊　ほんじょう　えいじろう（1888-1973）。1918年助教授，23年教授。経済史。1942年退職。

1）瀧本博士，経済一家言　411頁

ことは云わずとも明かなることであろう。我国について考えて見ても，我国の文明は，支那の文明を受け，朝鮮の文物を輸入し，又は此等を通じて，印度方面の文明に接し，最近また欧米と交際してその文化を受け，此等を咀嚼して築き上げられたものであって，外国交通との関係が頗る重大なる要素をなせることは否定する能わざる所である。故に我国の経済の発達を考うる場合にも，世界の経済発達の有様を考えなければならぬことは勿論である。特に近時における如き，世界交通の発達せる場合には，相互倚依の関係は一層密接なるものがあるといわなければならぬ。

三

然しながら一面から考うれば，西洋には西洋の風があり，東洋には東洋の風がある。同じ西洋の内でも，英国と大陸諸国とは亦自ら趣を異にし，大陸中にても仏国と独逸とは事情を異にする所が多く，同じ人種の国なればとて，英国経済史と米国経済史とは，同一の発達を示せるものとはいえぬ。況や日本経済史と西洋経済史との関係に於いておや。蓋，各国の地理気候とか，制度とか習慣とかの所謂経済発達の条件は必ずしも同一ではない。或る国に盛に行われたる事柄なればとて，必ずしもそれが他の国に於いて同様に盛に行わるるものとは限らない。又彼我交通の関係が時には密接であっても，他の時には疎略になったこともある。何れの国も全然その特別の性質を没却して，一般普遍的のものと化することは決して容易のことではない。爰に於て乎，その発達の大勢は外観上，大体同様の経路を採るにしても，其内容に立ち入って考うれば，種々なる特殊の原因事情の存するものである。而もその特殊の事情が其国にとっては頗る重要なる構成部分を成す場合も少くない。かかる場合に於いては，その特殊の事情を閑却することは決して穏当ではない。孤立的に考うることはもとより不可であるが，さればとて各国各種の特徴を閑却することも亦不可である。世界に於ける発達の大勢と，我国における特殊の発達とは，両々相譲らざる重要さを有するものであって，両者を適当に評価することが必要である。余が茲に日本経済史の特性として論ずる処のものは，以上の意味に於ての我国経済生活の特徴を指すものであって，経済発達の根本的傾向が普遍的であることを否認するものではない。

四

日本経済史の特性については，種々なる方面より観察し，又種々なる程度に於て之を論じ得るものであるが，宜しく日本経済史の全体を蔽うに足るべき適当なる観察点を定めて，之を研究することが極めて必要である。若し然らずして個々別々の事柄を何等の秩序もなく列挙して一々比較するに於ては，そは無方針の謗りを免れざるのみならず，重要なるものを逸して，些事に捉えられ，軽重の度を異にせるものを同列に並べ，或はある観察点よりすれば同一性質に属するものを他の性質のものと並列する等の欠陥を生ずるからである。然らばその観察点は如何にすべきかというに，そは勿論人によって種々の見解もあることと考えるが，余は次の三点から考察することが最も適当であると信ずる。その三点というのは，第一には経済の主体，第二には経済の素質，第三には経済の様式が是れである。

五

第一の経済の主体というのは，即ち経済を営む国民のことであって，この方面について，外国の歴史と著しく異れる特性は，経済主体の連続性ということ是れである。内田博士は国史の特性として連綿（コンチニユイチー）性なるものを挙げ，第一に国

体の連綿性，民族の連綿性，及び精神的文化の連綿性の三者を数えられて居るが[2]，余の所謂経済主体の連続性はこの第二の民族の連綿性に当る。即ち外国の歴史に於いては，或る時期に於いて従来の民族が衰亡して他の新しき民族が之に代り，国民の主なる要素となった事例を見るが，我国に於ては，之に反して，国初以来同一の民族が日本の社会に於て引続き主なる位置を占めて今日に及んで居る。もとより日本民族は単純なる成分より成れるものではなく，其根源に遡り，古来の歴史について考えて見れば，種々なる民族的要素が結び付いて出来上り，其後と雖，他の民族的要素の加わりしことは明かであるが，常に之を同化し吸収して，総て区別なき一のものとして，今日に至れるものであって，かの原住民族や帰化人は，最早決して蝦夷として，土蜘蛛国樔として存在せず，帰化人の子孫も，帰化人として判然区別すべきものではなく，何れも大和民族と融合し同化したのであって，国民の中枢となり発展の主勢力となれるものは，常に大和民族そのものであった。されば日本経済史全体として考える場合にはある時期までは甲民族の経済史，或時期からは以後は，乙民族の経済史というが如きことはなく，日本経済史は常に大和民族の経済史として，その連続性を保有し前後を一貫せるものである。

六

次に経済の素質の方面より観たる特徴とは，我国の経済的発展なるものが我国独自の力にて行われしものなりや否やの問題であって，この点については，既に述べし如く我が国の文明は支那朝鮮の文明を受け或は印度方面の文化に浴し，最近また欧米の方面よりも文物を輸入して築き上げられしものであって，若し外国文明の刺激無かりし場合には，我国は果して今日の状況にまで進み得しや否やは大なる疑問なりと考えらるる迄に，その影響は甚しきものがあった[3]。上古における手工業の発達が帰化人による所多く，班田収受の法が唐制から受け入れた所のものであり，仏教の伝来によって，建築彫刻工芸等の発達を見しのみならず，鉱業も交通機関も商業取引も促進せられ，一般経済上に非常なる影響を与えしことは言う迄もなく[4]，其の他個々の事例を引用するに遑なき次第であるが，大体に於て奈良平安朝時代に於ては隋唐の文化を採取し，経済上のみならず諸般の方面に亘って支那と趣を同うするに至り，鎌倉以後多少日本特有の風を生じ，徳川時代に至っては，日本の国民文化は一通り成熟の域に達したものであるが[5]，維新以後西洋との交通が盛んとなるに及び，茲に西洋文化の強き影響を受けて経済上大なる発達をなし，欧米模倣の産業は国有の産業に比すべからざる発展を遂げるに至ったものである[6]。

かくて経済上のみならず，我国一般の文化が，外国交通の刺激による所多きは何人も異論を挟む余地なき所であるが，これが為に我国の歴史若くは経済史は模倣の歴史なりと考うるは必ずしも正当ではない。蓋支那や印度の模倣と考えられて居ることでも，よく吟味して見れば彼の国の制度基盤の模写ではなく，我国特別の事情を参酌されて居ることが少くないのであって，その本国に於ては見ることの出来ぬ特別なる趣を具えて我国に存して居ることは，単に模倣のみに終わりしに非ずして，模倣の中に自ら改造の意を偶し，我国特殊の発展を遂げしものといわなければならぬ。

2）内田博士全集第三巻　国史総論及日本近世史。9–13及び311–314頁

3）辻博士，海外交通史話472頁以下，日本文明の性質について参照

4）河田岡本両氏共著，日本の経済と仏教参照

5）内田博士，前掲書，314頁

6）戸田博士，日本の経済　16頁

要するに外国の文明をよく咀嚼し同化し改造して築き上げられたものが，日本の文明であるがこのことは経済の方面に於ても勿論同様であり，外国文化の影響の著しきことは，日本経済史に於ても一の特性として数えるべきものである。

七

最後に経済の様式から考える。経済の様式とは如何なる形態の経済が主として行われたかということであって，これらも観察の標準によって，或は産業の形態から考えることも出来，交換消費の関係から見ることも出来，其他種々の観察点を定むることが出来るが，ここには普通に考えらるる産業形態からの発達について我国の特徴を捉えて見たいと思う。

リストやグロッセの階段説によれば，産業の形態は，大体に於て狩猟牧畜等の状態から農業に進み更に商工業に発展するものとせられて居る[7]。然らば我国に於ては如何というに，原始時代には，人々は一般に狩猟漁撈等によって食料を採取したものであるが，牧畜時代なるものが我国に存せざりしことは一般に認めらるる所のものである，且農業も亦極めて早く太古より行われ，勧農は国の重要なる政務の一として考えられたものである。奈良朝以後に於ては農業は我国の基本的の産業となり，農は天下の本なりと称せられ，徳川時代殊にその中葉以後に於ては町人の勢力が次第に興り来りしも，農業は依然として我国の唯一の産業と称して差支なきものであった。明治維新後，商工業の発達は殊に著しきものがあり，商工立国の声頗る高きも，国民の大部分は尚お農業に従事しつつある有様であって，斯業は依然として我国産業中最も重要なるものとなって居る。

欧米先進国に於いても，嘗ては漁猟牧畜より農業に進み，農業が産業の中心たりし時代も有るが，現在に於ては或は農業衰えて商工業のみ進めるものもあり，或は農商工の併立を見るも，その実農業は特に保護を加えて，其の自然の衰頽を妨げるに止まるものもあり，或は農工商共に存し何れも大いに進歩せるも而も商工の発達一層著しき国もあって，要するに農業時代というよりは，商工時代というの適当なるを感ずる次第であるが，我国に於ては上述の如く，実に農に始まって今猶農に居るの状態である。これはもとより我国の政治的事情や地理的事情にも拠る所である。蓋，我国は大陸から離れて島国として存在し，海外との交通も上古には盛んなりしも，中世に至って却て退嬰的となり（これ上古に外国文明の影響深くして，中世に至って稍々我国特有の文化を生ずるに至りし所以である）この事情の下に我国は我国にて自給自足の経済を立つることとなり，従て国民の食料を供給する農業が最も主要なるものとなり，政治的事情より国民の海外発展を阻止せしのみならず，農業それ自身が保守的性質を有するものなるより，従て自由なる精神を必要とする商業を生み出すの力，極めて乏しく，徳川時代に至っても，その精神は同様であり，時代の経過と共に我国特有の文明を作り出し，明治に及んだものであるが，維新後，欧米と盛んに交通し欧米の文物を受けて，欧米模倣の産業は大いに発達せしも，固有産業の一たる農業は，地理的事情其の他の原因に制せられて，同様の発達を遂ぐるに至らざると共に，国民が特殊の生活慣習を有するより，今猶国民の大部分が農に従事し，農業は依然として我国の最も重要なる産業たる地位を有する次第である。かくの如く我国が農業国として終始せることは，欧米先進国の経済史に比して一の特徴たることは明かである。

八

日本経済史には，主要なる観察点より見て以

7）拙著，経済史研究，4頁以下，及び経済史考，2頁以下参照

上三種の特徴あることを認めざるを得ぬ。その特徴の是非善悪を論ずるは経済史の範囲外である。而してこの特徴を生ずるに至った原因については，我国の地理的社会的条件によることが少くないと思うが，それは他日に譲り，此処には本問に関係して比較研究及び一般研究に就て少しく附言することを許されたい。

日本経済史の特性を知るがためには，勢い我国の経済的発達と，外国特に欧米先進国の経済的発達とを比較し考察するの必要がある。この比較研究については頗る綿密なる注意が必要である。我々は各国経済史の比較研究によって，一方に於いては，或る国に特有の事柄であると考えて居ったことが，他の国にも符節を合するが如く，同様の事例の存することを知ると共に，他方に於いては，時を異にし処を隔てるによって，両者の変遷が極めて著しく異れることを知るであろう。然るによくよく鑿索を遂げて見ると，さきに同様であると考えて居たことは，単に外観上だけのことであって，その事柄の真底に横われる意義より見れば，著しき相違あるに驚くことがあり，又反対に，外観上異れりと考えし事柄が，その内部の意義からいえば，同様のものであるに心付くことが少くない。故に単に甲国に或る事実があり，乙国にも同様の事例があったということのみより速断するは，必ずしも正鵠なる観察を遂ぐる所以ではなく，比較研究に当っては余程綿密なる注意を払って，外観上の事柄のみならず，その内部の原因，周囲の事情等をも考え判断を誤らざる様に心掛けねばならぬ。

余は嘗て比較研究は正確なる特殊研究の基礎の上に築かれなければならぬことを説き「多くの特殊研究から圧搾された概観でなれば，その概観は極めて根拠の薄弱なる概観に過ぎぬ。砂上の楼閣では我々は最早満足することが出来ぬ。疾風強震にも動揺せぬだけの精確なる基盤の上に概観を立てなければならぬ。我々は比較研究の必要は大に認むるものであるが，先ず特殊研究から進んで行くことの必要を痛切に感じつつある次第である」[8] と論じた。然るに未だ多くの特殊研究をも成さざるに拘らず，日本経済史の特性というが如き概観を説くは，矛盾せるの甚だしきものの如くに考えらるるかもしれぬ。然しながら，翻って考うれば，日本経済史の全般に亘れる知識なくして，直ちに特殊の問題について，細い研究をなすことは，往々にして大局の観察を誤り，常例と例外との区別を閑却し，その論断が常に偏奇する虞れあるのみならず，一般に労多くして功少き結果を来たすを免れない。それ故に先ず第一に，一通りは日本経済史の一般について研究をなすべきものであって，然る後に，特殊の問題について研究の歩を進め，最後にまたそれを総括して大体の上から観察を下すことが必要である。国史の研究が宜しく国史総論に始まって，また国史総論に終わるべき筈のものであると[9] 同じく，日本経済史の研究も，須らく一般的研究に始まって一般的研究に終るべきものであることを知らねばならぬ。

以上述べし如く比較研究は極めて重要なるものであるが，至難のものであり，従って此処に日本経済史の特性として論ぜし事柄の如きも，或は単に外観に捉えられて，事の真相を得ざるものあり，他日の斧正を要する点もなきに非るべしと雖，従来日本経済史に関する特殊研究は可なり多く発表せられおるが如きも，総括的研究は，上述の如く重要なるに拘らず，あまり多く公表せられず，此の問題に関しても纏まりし一の論文として発表せられしものは，極めて乏しきを以て[10]，推敲未だ足らざるも，敢て茲にこの一文を草せし次第である。

8）拙著，日本経済史原論　91頁

9）内田博士，前掲書，3頁

10）此問題に就ては佐野学氏，「我国経済生活の特徴」あるのみ（同氏著，日本社会史序論及日本経済史概論参照）